

翻刻 島根県立図書館蔵『萬延二年御嶋日記』

芦田耕一

ここに取り挙げるのは、島根県立図書館に所蔵されている「萬延二年 御嶋日記 千竹園」と外題に記される書である。最後に、「簸川郡杖築町富永量三所蔵ノ原本ニヨリ謄写ス 大正元年十一月三十日 島根縣史篇纂掛」とある。日記と「勝間山松之事」から成るが、本稿では日記部分だけを翻字する。

これは万延二年（一八六一）三月四日に、松江藩士森為泰（一八一〜七五年）が藩士の松井言（本文には「会」とある）正、三上吉利、土岐国彦、和多田伊後、そして子息の永雅とともに『出雲国風土記』『秋鹿郡』に「御島。高六丈、周八十歩。有松三株。」と見える「御島」を探訪した折の日記である。「御島」は現在の魚瀬の女島であり、その松を觀賞するための日帰り旅行であった。

為泰は千竹園と号し、文武両道の文化人である。出雲大社国造の千家尊孫に歌、松江藩侍講の中村守臣に国学を学び、若年時より弓、馬、劍、槍に精励しており、すべてに熟練の域に達していたという。技芸としては

出雲琴に通じていた。晩年には藩校の歌学の訓導に任じられ、同時に『出雲歌集』編纂の命を受けるが、未成のままに没する。

旅行の前年に為泰は五十歳をむかえており、五十歳の算賀が行なわれるはずであった。しかし翌万延二年の一月に延期になっている。これは病氣か心労に悩まされていたからであり、万延二年の春に「老の波五十の春によせてけり浮きつ沈みつ世を渡る間に」と詠んでいる。それゆえに、この旅行は快癒してからのことである。強行スケジュールの上、古浦から海岸に沿っての岩場伝いの難儀な旅ではあったが、為泰にとっては心楽しい実地検証となったのではなからうか。なお、『文久二年八百首』に入集する「千竹園為泰ぬしの五十賀に寄出雲国名所祝といふことを」で、「御島」の「松」が四首詠まれている。作者はいずれも松江藩士の竹内修智、柘植正常、小田柔嘉、佐野則孝であり、同行はしていないが、この旅行を知ったうえで「御島」を選んだと考えることもできよう。

以上、簡単に紹介したが、為泰の事績を知る上での貴重な一資料となるであろう。

なお、関和彦氏に『御嶋日記』にみる幕末の国学人間模様―萬延二年の旅日記―（『出雲古代史研究（第一九号）』）がある。この日記を最初に見出し、紹介されたことは地元に住む者としては大きな衝撃であった。ここに謝辞を表したい。

（凡 例）

- 一、本文の翻刻に際しては、底本の本文を可能な限り尊重するべく、漢字と仮名の別、送り仮名、仮名遣い等はすべて底本のままとした。なお、改行は私に行なった。
- 一、漢字は新字体を用い、俗字や異体字は原則として現在通行の活字体を用いた。
- 一、通読の便を図って、句読点、濁点を付した。
- 一、影印と翻刻をお許しいただいた島根県立図書館に深謝します。

（翻 刻）

万延二年辛酉春三月四日、秋鹿郡魚瀬浦なる御島の松見にとて曉起出ぬ。風土記に御島高さ六丈周八十歩松三株あり。又出雲国地理沿革図といふものに御島松今

猶ありとあれば、そのあたりにすめる浦人に逢度毎にとへるに、神代以来かれし事なし、今に立栄へぬといひ、又さばかりのものにはあらずといふ人もありてたしかなる事しりがたければ、行て見る外はなしとかねてちぎり置て、ともなひ出だしたるは松井会正、三上吉利、土岐国彦、和多田伊後、子息永雅等なりけり。春日の里、法吉の里など打過る時に、

見渡せばまだ夜を残す山かげに花計にぞしらみそめ
けれ

きざすなく山がたつきて咲花の色にわかるゝ横雲の
そら

ほのぐとあらはれそめし花に鳴鶯谷の春の明ぼの
春の日のかすがの山の花さけばはふきのさとの鶯も
なし

佐陀橋近きあたりに身澄池と石立たるあり。是は三角の池にして、そのかみ稲種天降しところなりといひ伝へたるよしなり。

桜さくみすみの池に御祓して心さへてそいざ清くな
れ

いつのよかあめのゆだねのあもりきてとよ芦原の国
とましけむ

此池におり立て手洗ひ口そゝぎなどして佐陀川堤にて、いつか又きては三笠の山桜花のしらゆふかゝるけしき

佐陀橋打わたりて大鳥居のあたりに自然石の燈籠水の

浦より立たるあり。いとめづらしき物なりけり。その台石に尻かけて、馬場の花、三笠山の桜いとうつくしくさけるをうちながめつゝ、腰にさげこしにぎり飯とり出てくらひつゝ、

神なびの三笠の山にかゝりけり(絵1)高したふとき
花の白ゆふ

山ざくら馬場の桜神垣に春のかけたるぬさと見え
つゝ

大宮をゝろがみて名分村なるさがり松見にと、又はしわたりかへりて世に名高き古勝間松、又ひよし塚といへるはいづくにかとふに、人ありてをしふるまにく行見つ。

神代の松の枝枝づしくと此ひこばえにおもほゆるかな
な

つちが根をおろすと計みゆるかな勝まの山の松のし
づえは

此松三十年あまりむかし見に來りしまでは、さばかりの
大木ともおもほえざりしを、けふみるにあらましには
いたう違へり。

年を経てかつま山松きてみれば老にける哉神さぶる
まで

今更にむかしおもへば常盤なる松も老にきわれも老
にき

扱此松の子宿にもて歸りて植おけといふに永雅根こじ
てけり。伊後にはからせたるに、松の高さ十間わたり九

間ばかりといへり。みづからはめぐりさして見るに一

丈二尺五寸あり。むかひの岡より松の姿うつして畑中に
歛もたるをのこに聞に、神代ながらの大松はみやこの
西にならびなき名木なりしを、其松かれて後に其子

又たち榮へたりしが、それも又かれて今三世に及べり
となん。十年計以前みまかりたる八十余りの古老をさ
なかりし折、此松にのぼれるにいまだ若松にてみきよ

りくだりめりしよしかたらひしを折々聞はべりといふ。
爰にいたり時うつりて古浦にいたれるに皆人腹すきぬ
といへば、二見の浦めきたる岩ほあるもにて自在鍵

などして湯わかし、おのれは敷ものもて出たれど、人々
は松の葉或はかやのかりつかねたるなどおもひくにし
きて、その上に居て腰につけこし(絵2)飯とり出でお

のもくたうべてのち、足羽美生けふともなふべき契り
なりしを俄にさはることありてえものせざりしを、け
ふのまうけにとてうじおけりし薄茶を吉利しておこ

せたるをとうでゝのむ。そのおもしろさいはんかたな
し。
ありそ海の磯になみゐてこのめのむ春のたのしさ何
とうたはん

沖にへに立かへる波のたかぐにのぶるはけふの命な
りけり

伊勢の海をうつす古浦の浜びさしこゝも二見の荒岩
にして

此二つの大岩殊に風景よし。形ち写しおけといふに永

雅矢立取出てものす。

これより六坊浦へこゆる山坂にかゝれるに岩魚綱なりとて海中におろしまはれる漁舟を魚見小屋とて高峰にかまへたる所にて、わら一束づゝ両手にもちてかなたへこなたへと打ふりさし、はせるありさま、軍をつかふものゝふの軍幣をとれるもかくやと思ふ計に見る人の心さへいさまれてけり。永雅らはかの魚見舎の屋の上のぼりて見て、こゝにも時いたううつりて六坊浦にいたれるに、いとむつかしき所なりけり。かゝる所にもすめばすまるゝものかなとい(絵3)ひつゝ打過て芹尾鎌田をへて魚瀬にこゆる山路にて、

誰にかも見よとて咲る花ならし人もすみえぬ山の高ねに

よぶこ鳥それだに鳴ぬ山中は何をたづきに分のぼらまし

鳥もかよはぬ高峰をくだりてをのをの浦に出たるにいとあらくしき磯辺になん。先尋ねきたりし御島を見るに岩ほそびえめづらしき島なりけり。舟にて渡りなるといふに、けふは海あれてわたりがたしといふ。此松見にはるぐ来りしものをいかでかおもひやむべきと浦人に瀬踏(絵4)せさせて、そのあとより渡りかゝれるに、さき越てもゝまでつかれる所二所ありて、永雅背負て渡らんといへど老ぬとておはるべきかと残りゐるに伊後と永雅とふたり先がけて渡れり。つゞきて吉利とおのれわたりえぬ。言正と国彦は浜にとゞまれり。伊後と

永雅はみしまの松目にかけてのぼれるほどに、松のめぐり見とゞけてよといふに、二人きそひて荒岩かどをかなたこなたへ飛渡りのぼれるをみるに、そのおそろしさむねとゞろきて足ふるひ踏所さへいとおぼつかなくして今はおりぬべし、甲斐なき事どもありてはといふを耳にも聞入らず、高峰にはのぼりえたれども只岩かどにいたつきたる計にて、かの松の根までではえ行がたしとてやがて吉利と二人待居たる所までかへりくだれり。こゝにてふくべの造酒松に手向て四人一杯二杯づゝ吞てよみて奉れる、

神代より千年八千年栄へこし三島岩根の松の尊さ

この松もおもふに風土記にある三株の二株はかれて一株残れるものなるべし。今はすべては八株生たるうち七株はいとちひさくほそ弓に立のびたるは後生たるものならんかし。只大いなる一株こそいと古めきてたてれ。その見わ(絵5)たし松隔たる事七八間計なるが、めぐり六尺ばかりとはじめ浦人のいへりしが、四五尺計にやとおもはる。七株の松もいつ生たりといふ事知人なしとなん。むかしより此まゝにして有ものからかゝる岩峰に生てわた中の塩風にもまれ、さらされて大きくなる事あたはざるものといひしはうべなりけり。今はと又つるはぎにして、かちわたりしてもとのままびかへりしに、にぎめあまたほしたるを、海土に乞もとめて、磯ずたひに取りあげたる舟のともいたの上に腰の飯こりとりにてゝならべ、くらひつゝ、

あま少女わかめかりほすすらすかきかきめもあらしき
波の音かな

風をいたみ磯の岩ほに打よせて行へもしらずかへる
浪かな

かへる山路にむかへるに谷川の岩かどをかなたこなた
を狐飛くだれり。あなめづらしと見るにおどろきてし
ばしたちかへりて、かれも又こなた打見たり。

人絶て波の音せぬ磯へには昼もきつねの有かよふ也
是よりもとの山ぢをのぼりくだりて、あしをより浦づ
たひに六坊へかへるべきを、いつとなく道にまよひて、
おそろしき高峰打越てこし時、見なれぬ所とて樵夫に
とへばこゝなん秋鹿村なりとてこたへける。我も人も
いと心ぼそく成にけり。是よりは長江村に出るかへり
なば道のほどちかかりなんといへど、古浦にあづけも
のあれば又山をくだりまはりて漸むつぼへ出たるに夕
日はや波にしづまんとせり。古浦への山路くれなは殊
におぼつかなしとつかれにつかれこし心よくなり
ければ、風もおち海もすこしなきたるほどに舟をとて
其まけて打のりて、

浦の名の六ぼ二つぼ減少し四坪たゞけり長遊して
しましこぎ出て、

荒磯の八重山なして立波の上ののりてもゆく心かな
をしまの陰陽石はむかし見て写しおけりしかどなほ今
日立よりて高さめぐりなど、はかり置べしとのあらま
しなりしを、かの長遊に日くれて立よるべくもあらず。

磯のかなたはるかに打ながめたる計にて打すぎぬ。さ
れどこゝのゆかりにかへりて尋ねみるに、文箱の底に
そのむかしうつしたる懐紙のうもれてあるをとり出て
ものしつるなりけり。

心なき岩ほみるにも天地の(絵6)おのづからなる道
はうごかず

世にひろくかたり伝へて見せまほし聞せまほしき岩
ほなるかな

古浦の二つ岩近く漕かへりし折雄島の沖をしみやりて
三日月の雲井につゞく波の上にほのめく星やあまの
いさり火

はじめ薄茶のみし岩ほのありにふねすてゝ是より歩行
にてやみぢたどりく、

分そめしあしたの花に引かへて見へぬは春のやみぢ
なりけり

からうじて本郷の橋のつめまでかへりきて或家に立よ
りて湯あつくわかさせて残れる飯ゆづけにしてくらひ
て爰にて松明乞て出たり。

花ならでつかれこしみは野に山にとまれば夜も行な
づみつゝ

生馬までかへりしに松明なくなりぬ。

おぼつかかな旅の命と頼みこし松さへ消えぬ春のやみ
ぢに

こゝにあやしき事こそ有けれ。四日御島にのぼりし時、
峰の松のね、けふのしるしにて永雅もてくだれり。扱

海渡りかゝれる折、石もひとつと力にまかせて大いなる石を荒岩に投たりけるに波にされたる所かけ落ちてけり。それもてかの浜びにわたり帰れるに若布乞たる海士見つけて、それもて帰り玉ふな、しらずしてもてかへりし人必齒痛てくるしめりとをしへたり。さらば松のねはいかにとたづぬるに、石をこそ此島の神はをしみたまへ、そのかれたる松のねはさのみおしみ玉はじといへるまにくもて帰りしに、其かへさ生馬あたりよりしきりにおのれ齒いためり。是は馴ぬ山ぢのくるしさにくたびれてかたのすぢのこれるゆゑにやと心もおかざりしに、今日十五日まで夜昼となくいためるまにくやうく心づきてさらば申ひらきすべしと法吉の山の峰

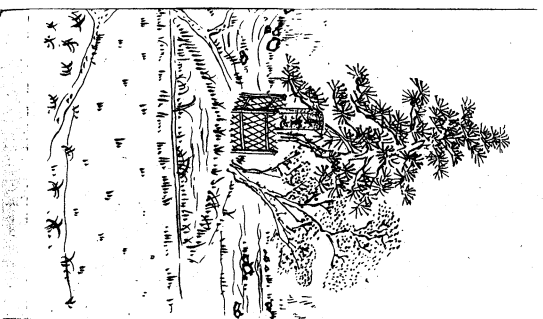
にのぼりて、松の根は齒いたませ玉ふかはりに玉はるべしはや、十余日このかたくるしめるほどに今はゆるし玉ひね、今日よりいやし玉ひなば明日又歌一首奉りて、此島の日記に神のくすき印をしるし置て家にとゞむべしとねぎぬかづきて、

神たゞりかしこまれゝばこもりくのはるかにかよへ
御島浦風

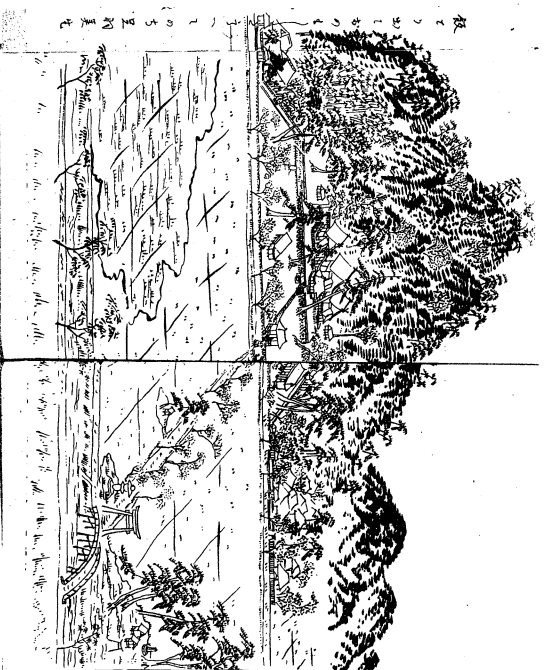
かくていたみいつとなくいえて十六日のあした打忘れたるばかりなり。さてはとて又詠て奉れる、

いためるもいゆるも心ひとつにてかしこきものは神
のみしらせ

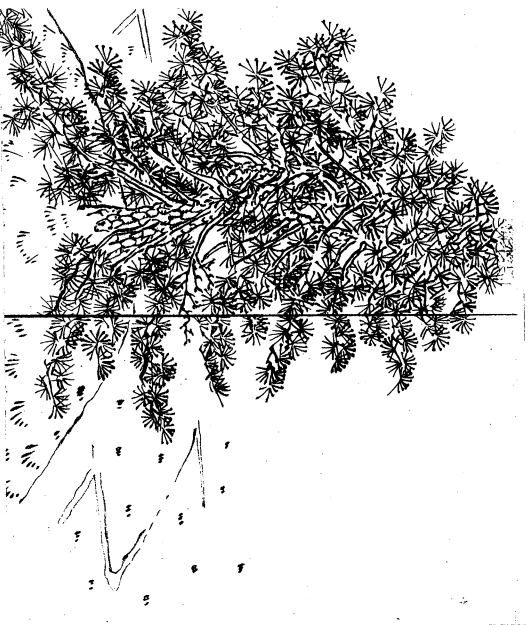
(本学教授)



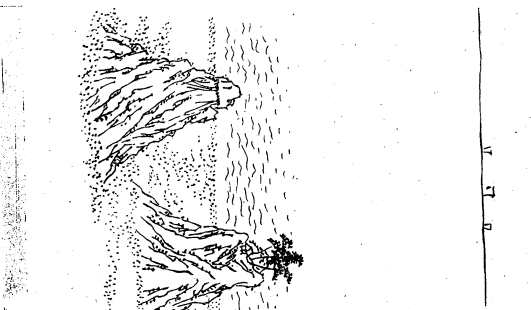
繪 1



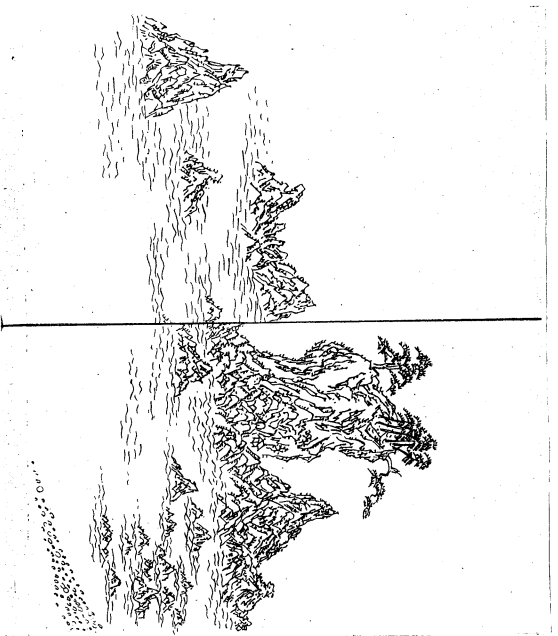
繪 2



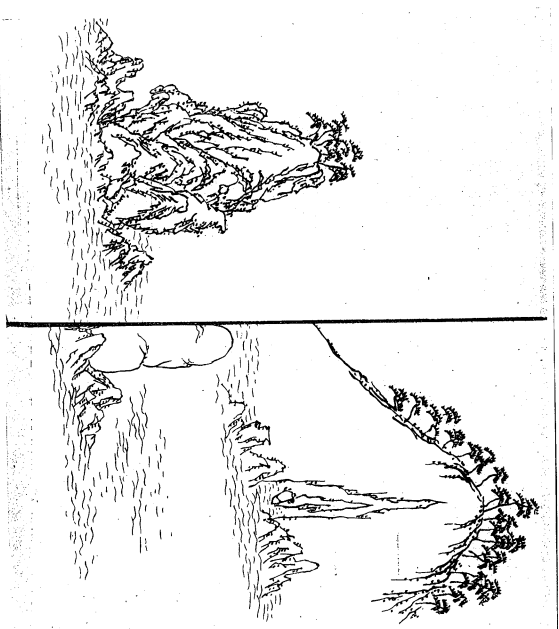
繪 3



繪 4



絵 5



絵 6